

□ 大学の概要と歩み

名古屋から名鉄犬山線二十分、木曾川沿いの畑作地帯、巨大な藤ヶ丘団地に代表される名古屋のベッドタウン、高級カーテン生地生産全国の七〇%など繊維産業中心の江南市。市の東北部の畑の真ん中に江南女子短大はある。

学科構成は次のとおりである。

(1)生活科学学科 入学定員 一四〇名

生活科学専攻 五〇名

Aコース(インテリアデザイン系)

〈二級建築士受験資格〉

Bコース(インテリアコーディネート系)

〈秘書士、インテリアプランナー受験資格〉

資格)

食物栄養学専攻

九〇名

栄養士養成コース

〈栄養士、医療秘書士〉

食物技術コース

〈全国料理学校協会教員資格、秘書士〉

士

(2)教養学科 入学定員 一〇〇名

〈秘書士、レクリエーション・インストラクター〉

(3)幼児教育学科 入学定員 五〇名

〈幼稚園教諭二種免許、保育資格、レクリエーション・インストラクター〉

(4)幼児教育学科 第三部 四〇名

〈幼稚園教諭二種免許〉

設立は一九七〇年、当時隆盛を究めていた林紡績会社社長が、自らは小学校卒業だが、働きながら学ぶ子女も通える

「日本一」の短大をとの意気込みで創設したときいている。学長に元日本澱粉学会会長二国二郎氏を擁立、教員スタッフと設備をそろえ、教授会を中心とした運営機構など、決して営利目的ではない

「生涯学び続ける女性の育成」の建学の趣旨が貫かれた草創期のしつかりした基盤づくりがうかがえる。

その後、紡績界の不況により経済的にも全く企業から自立、理事長に元名大

長の芦田淳氏、瓜谷郁三氏、学長は井上友治氏、熊田恭一氏、保田幹男氏、柘植利之氏が歴任。第一級の研究者が経営と

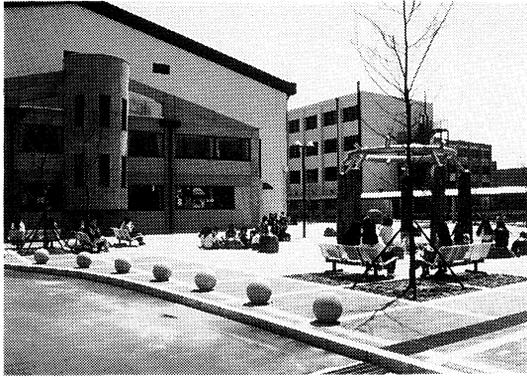
教学の責にあたつてきているため、研究と教育本位の短大として地道に発展することができてきたといえよう。

学生数に比し教員数が多いため、待遇もよくないし、職員数が少ないため教員の事務量も多いが、理系教員は学位を取得する者も多く、研究、教育にうちこめることが教員にとつても最大の魅力であり支えとなっている。

□ きめ細かな教育実践

短大の使命は四大と同様、人間形成と専門的職業能力の育成にある。

小規模短大(全学生数約九〇〇名)は、教員が深く学生とかかわれることでこの



二つの目的が果たされやすいという利点がある。食物栄養学専攻はクラス担任制、他の専攻は、皆二年間持上りのゼミ制をとり、担当教員の研究テーマにそった研究を中心に、調査、見学、合宿などおこなう。学習上、生活上、進路上の相談

にもゼミ担任は深くかわかる。卒業期には各専攻コースやゼミの特色にあつた学内外での発表の機会をもっている。

一般教育科目も、なるべく各専門の問題関心に沿う工夫をしながらも、人として普遍的に必要な知識をしつかり教授することを重視している。

「国際文化」は、東海地方在住の外国人に、二回ずつ講義を担当してもらっている。英会話、外国人留学生の受入れ、希望者の夏休み三週間カナダ語学研修、ヨーロッパ研修旅行などとともに国際化社会に対応できる女性の育成に力を入れている。「人間と科学」で地球規模での思考力を養い、全学生にコンピュータ実習を課して情報社会への対応力もつけている。

専門科目教育が充実しておこなえる工夫の一つとして、例えばインテリアコーズでは、江南市開発計画に提案したり、市街地の壁画製作に参加する。食物栄養専攻は江南市農業祭に参加する。幼児教

育学科も市民公開のコンサートを催したり、子どもフェスティバルに参加する。このようなことを通して専門の仕事の意味や有用性を実感し、意欲的になれる機会を意識的に設けている。

最多でも七十五名の小規模クラスは、授業を受けやすいこと、質疑応答がしやすいこと、講義の感想など学生の反応を把握しやすいこと、出欠をとりやすいことなど、血の通った教育をおこなうためには重要なファクターであることを実感する。

本学は、同年齢の六二％が高卒で働いているなか、短大教育を受けることを選択して入学したからには、まず授業に出ることを重視し、出欠は何らかの方法（新聞切りぬき提出、講義感想提出など）を工夫して必ずとり、三回以上休むと講義担当者やゼミ担任が呼んで理由をきく。五回以上は特別の事情のある場合以外、試験を受ける資格がなくなる。

卒業後すぐに通用すを即応力、学び続

けようとする意欲と自己学習の方法を身につけてほしいと願ひ、最低授業にしっかり取り組んでもらわなければ、学生を育てる機会をのがしてしまふ。自己管理能力も育たないだらう。

夫々の専門教育に情熱をもつて取り組んでいる教師が多いこともあり、学生の専門を活かした職業への就職率はどの科も七五%を超えている。保育職就職率は全国平均五〇%だが、本学は毎年八五%を超える。

#### □ セカンドスクールとオープン・カレッジ

本学は正規の授業以外に自主的に学習したい人に、セカンドスクールといつて安価にワープロ、ペン習字などの講習と検定試験の機会も放課や土曜日に用意している。

また、建学主旨からも社会人入学、公開講座も早くから積極的に取り組んできたが、九三年度後期から生涯学習の機会

として大学を広く市民に公開、通常講義の市民の聴講、市と提携し、市民の要望の強いテーマでのミニ公開講座の開設などを試みようとしている。

#### □ 地道な教育への評価

本学は、推薦入試枠、試験入試枠を文部省指導通り五〇%ずつとし、本来の推薦制度である専願方式を守っているため、受験産業誌では、受験者倍率でランクづけを行うのでそれほど高くない位置にある。知名度も低いが、地道な教育の中味とそれに伴う就職の実績が評価され、入学者とその周辺の親や教師や就職先の周辺に支持が広がり、妹や従妹の入学者が多い。卒業生もよく大学を訪ずれ、大学祭時におこなわれる同窓会は子連れで賑わう。

卒業式は密度の濃い二年間の思いが溢れるのだらう、殆んど全員が涙、涙で、学窓を巣立っていく。教育の仕事は、手ぬきをしては人の心を動かすことが

できず、したがって自らにかえってくるものもない。

小さな短大、江南の良さは、殆んどの教員が教育に打込み、たしかに学生が育ち、自分を見出しつつあるという手応えがあり、それによつて教員もまた成長している雰囲気一本通っていることだ。

学生会活動、大学祭活動も前向きで（九二年度大学祭委員希望者が百名も出て困った）、クラブ活動も、スポーツ、文化、とりわけボランティア活動で子ども達や障害をもつた人たちとふれ合えるクラブの活動が活発である。

そんな学生の気質は、こんな大学祭テーマによく表われているようか。「無印良女」（八九）、「Pie—いつまでも変わらない」（九三）といったぐあいに。

今後の課題は、専攻科や四年制への進学ルート、学士取得の道を拓いてやりたことだ。